マイコーナー No.266

宗旦狐

左京区 田中 誠孝

宗旦狐という名のついた香合がある。相国寺の境内に住んでいる狐が宗旦（利休の孫）に化けて茶席に出入りしていたという話にちなんで作られた香合である。宗旦狐は見事な点前を披露するも宗旦が現れると茶室の窓を破って逃げたとか、みんなが一緒に化かされて遊んだとか、破産寸前だった門前の豆腐屋のやり繰りを手伝い、繁盛させたとか、雲水にまじり座禅を組み、和尚と碁を打ったなどいろいろ言われている。このような話はどこからきたのだろうか、説話・俗信が多いのだろうが相国寺に住んでいる狐と茶道がすぐに結びつくようなことはどうも考えにくい。

禅宗に無門関（むもんかん）という公案集（無門関四十八則 禅の祖師達の具体的な行為・言動を例に取り挙げて、禅の精神を究明するための問題集）があり、その中に「無門関第二則・百丈野狐」に野狐禅（やこぜん）というのがある、禅を修業し、禅の悟りに達しないのに達したと思い込みうぬぼれることを言うらしい。百丈（中国の禅僧）が説法していたら、一人の老人が残って、「わたしは野狐だ」と言う。昔、僧侶であったが、説法していた時、ある僧侶が「悟った人は因果に落ちるか」という質問をした。それに対して私は、「不落（因果に落ちない）」と答えた。その後、私は五百生の間、野狐に身を落とした。そのように自分の正体をあかして、「どうすれば、野狐の身から脱することができますか」と問うた。そこで、百丈が「不昧（因果にくらまされない）」と答えたところ、その老人は野狐の身から解放されたという。「因果に落ちない」というのは、世の中の動きや人情の道理にはとらわれないという意味である。人が人に満足せず、他に求めてやまぬ時を「狐」と言う。

細川景一氏の研究によれば『もの事を生じさせる直接の原因を「因」と云い、間接的な原因、即ち因に加わる事情、条件を「縁」と云い、それによって生じるものを「果」と云い、その過程の中で、「因」が「果」に及ぼす力を「業」と説きます。例えば、一箇の豆の種子があります。これが「因」です。畑を耕し、種子をまき、水をやり、肥料を施す、これが「縁」です。芽が出て実がつく、これが「果」です。縁の働き具合で果も大きく違ってきます。悪い因でも良縁が加わればいい果が得られ、良い因でも悪縁が加われば悪果となります。私達の存在のすべてがこの法則に準じているのです。私達が良きにつけ、悪しきにつけ行なった一つ一つの行為の積み重ねが、私達の現在を造っているのです。しかも、それだけでは終わりません。それが因となって、当然、果を造って行くのです。これを「因果律」というのです。大修行底の人でも、決してこの「因果律」を免れる事は出来ません。即ち「不落因果」でないゆえに老人は野狐の身に堕ちたのです。では、百丈和尚の答えた「不昧因果（ふまいいんが）」とは何でしょうか。「因果律」の中にあって、しかもそれを越えた所、因果の中に在って、それに執らわれない消息、それを「因果を昧（くら）まさない」と喝破したのです。百丈和尚の「眼 まなこ」からすれば、野狐の身に堕ちる事もないし、野狐の身を脱する事もないのです。「因」も一時の位であり、「果」も一時の位であって、それだけで全的な存在なのです。野狐は野狐のままに絶対的な存在です。老人は、因果に執らわれて因果に落ちない世界を妄想して、野狐の身を脱せんと画策した所に、五百生もの長い間脱する事が出来なかったのです。百丈和尚の「不昧因果」の一喝を聞いて、野狐は野狐でよしと悟った時、逆に五百生の野狐の身を脱する事が出来たのです。（細川景一著 禅文化研究所刊より 2000．11）』とある。

宗旦が茶席でそのたぐいの話を誰彼に出していたとすれば「宗旦狐」が出来あがってくる筋道が見えてくる。宗旦は禅僧であったので禅の修行をし、清貧であるということから乞食宗旦とまで言われた。茶席に座り「行雲流水」の軸を掛け野狐禅の話を宗旦がしていたとすれば禅の修行などしたことのない庶民にとっては狐につままれたように感じたことであろう。これは仮説である、宗旦からすればこのようなことを書いていることすら野狐禅的なのかもしれないが。

宗旦狐香合